

「村ではなく、「ここ」でこそ養われる」

(マタイによる福音書14:13-21)

夕暮れが迫る頃、弟子たちは群衆を解散させ、村に食べ物を買に行かせることを主イエスに提案します。それは、人々が養われるのは「ここ」ではなく、「村」だと考えたからです。しかし、主イエスはそれを許さず、「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」という弟子たちに向かって、「それをここに持ってきなさい」と要求しました。「五千人に食べ物を与える奇跡」は、四つの福音書すべてに記されていますが、「それをここに持ってきなさい」というこの言葉は、マタイによる福音書だけの記述です。さらにこの箇所を直訳すると、「それらをここに、私のもとにもってきなさい」となります。「ここ」とは「私」＝主イエスがおられるところのことです。まことの養いは、「村」ではなく、主イエスがおられる「ここ」にあるのです。弟子たちはパン五つと魚二匹「しか」ないと言いました。これは当然の感覚であろうと思います。しかし、主イエスにとってはそれで十分なのです。なにせ、神はゴマ粒よりも小さなからし種を木になさる方です。大きさだけで見るならば、小さな種に比べれば、パン五つと魚二匹とはなんと贅沢なことか、とすら思えてきます。そしてそれが主イエスのもとに持ち込まれるなら、五千人もの人が「食べて満足する」ほどのパンに変わるのです。

このシーンを、マタイは「夕暮れ」と記しています。夕暮れの食事といえば、最後の晩餐を連想させます。マタイはこの奇跡の食事を、最後の晩餐と結びつけているのです。群衆を解散させようとする弟子たちに対し、「行かせることはない」と言われたのも、すべての人が最後の晩餐、主の晩餐に招かれていることを表しているからです。主の晩餐には誰もが招かれています。となればむしろ、弟子の役目は人々を散らすことではなく、その場にとどまらせ、主の晩餐へと招きこむこと、そして主イエスがそうされたように、パンを群衆に分け与えることなのです。

主イエスが、「あなたがたが与えなさい」と命じたことにより、このパンを分かち合う役割が弟子たちに「継承」されました。主イエスの手から弟子たちの手へ。主の食卓に招かれたすべての人は、主イエスがおられる「ここ」において、その手から分かち合われるパンによって養われることになります。そしてそれは、聖餐式に表されているように、時空を超えて、永遠に枯渴することのない食卓として、2,000年後の今、この主イエスの分かち合いの食卓はこの教会の交わりにおいて実現しています。

かつて神がイスラエルの民を「荒れ野」で養ったように、主イエスも群衆を「人里離れた」所で養います。「村」に象徴される社会的、経済的なものがもたらすものとは別のところで、主イエスはわたしたちの命の糧であるパンを与えてくださるのです。その主イエスは今も「ここ」において、命の食卓へとわたしたちを招き続け、養い続けてくださっています。